

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第140回

「あいだ」の哲学に向けて：人文知の再定義と復権のために

藝術行為再考に向けた、暫定的な覚え書き(上)

稲賀 繁美

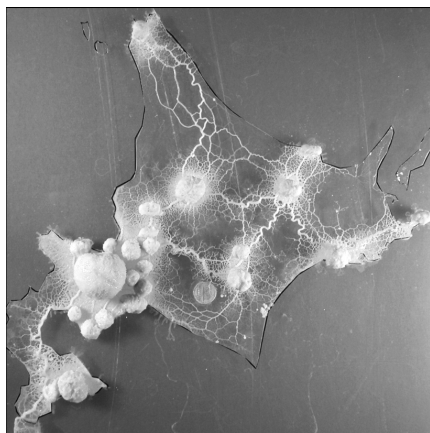
(いなが しげみ/国際日本文化研究センター、総合研究大学院大学教授、放送大学客員教授)

0. 粘菌的思考と別種の知性に向けて

中垣俊之『粘菌 偉大なる単細胞が人類を救う』という本がある*1。ネタバレになると申し訳ないので、内容紹介はあえてすまい。著者は、イグ・ノーベル賞を二度も受賞したことで、知る人ぞ知る科学者。イグ・ノーベル賞をご存じない方は、本書第1章に授賞式の様子が活写されているから、ご一読を。ノーベル賞のパロディとして知られるが、筆者など本家本元の賞よりも遙かに将来性があると睨んでいる。藝術創造にも繋がる未知の「発見」に開かれた「笑える」成果が受賞対象となるからだ。

本書で扱われる主人公は「粘菌」。宮崎駿の、いまや古典となった『風の谷のナウシカ』に、その巨大変異体が制御不能な生物兵器として登場するから、お馴染みのことだろう。粘菌は餌を求めて動物のように移動するが、環境が悪化すると、茸のように胞子を飛ばすことで世代交代する。森のなかで枯れ葉の下などに生息する単細胞生物である。「単細胞」に知性などあるまい、と思われてきた。確かに中枢はおろか、神経系などもたな

い。だがその捕食行動や毒物を回避する逡巡ぶりには、高度な知性や意思と見まがう振る舞いが観察された。粘菌は、捕食のための物資流通網を、己が身体で、最適解として自己組織する。首都圏や北海道の地勢的条件を縮尺した環境内で粘菌を行動させると、なんとヒト様が営々として築いた鉄道網と生き写し、むしろ人類顔負けの線路網ができあがる。見方によっては、人間にも「粘菌なみの知性」はあったことになる。■1



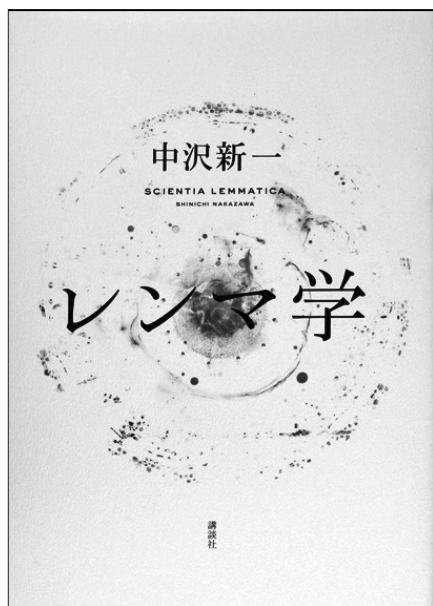
■1 北海道の地形的条件のうに展開した粘菌の繁殖＝捕食形態 <https://ife.sci.hokudai.ac.jp/mf> 北海道大学 理学部 生物科学科 高分子機能学提供

冒頭の枕に粘菌研究を引き合いに出したのは、ほかでもない。粘菌の行動は一見予測不能だが、結果的にみるときわめて合理的な、捕食と危機管理との模範解答を提示する。これに対して、今日ただいまの「最高知性動物」には、最初から目的を明確に設定し、手段を正当化し、立証手続きを順々に踏むコチタキ論理構築が要請される。とりわけ自然科学や社会科学の領域では、さなければ論文や書類が受理されないし、そもそも予算獲得がままならない。

だがいうまでもなく、論文作法は実験や調査の現場での試行錯誤とは異質な、事後的な整理の提示にはかならない。人文学は、ともすれば、これとは異なる風景を提示してきた。文化人類学などでは、研究目的も不鮮明な道行きをそのまま忠実に記述する方法が模索された。さらに文章一般が一次元の線上に推論を並べるのに対して、二次元の平面絵画は因果律の統御を嫌い、画面の読解は上下左右が融通無碍であり、連想が自在に拡散して、思わぬ脈絡が派生発展し、時間の前後、原因結果も頻繁に転倒する。ここまでくれば、理系と文系とを対比させる図式そのものも、はや疑問に付されることになろう*2。本稿ではその基礎の問い直しを試みる。

とはいえ粘菌同様の「盲目的」とも見紛う進路展開では、読者に対して不親切だろう。あらかじめ見取り図だけは示しておこう（行方定かならぬ彷徨の結果から振り返っての、後智恵の整理となるが）。自然科学では「同一律」「矛盾律」「排中律」という記号論理学の原則に則り、もっぱらアリストテレス以来の「三段論法」に即して成形した論理展開で議論を進めることが、鉄

則として要請される。本稿では、まず、これらの大原則をひとつひとつ再検討し、それらが根拠薄弱な常識に依存していることを、明るみに出す。この作業からは、通常自明視される「同一」と「差異」の関係も揺らぐことになる。「動物」とも「植物」とも見える生態を循環する粘菌的運動の「曖昧さ」、¹「意識」とも「無意識」とも決定できない融溶状態、ゾルとゲルとのあいだを往還する、どちらつかずの「中間の様態」が、ここであらためて注目される。この表裏の文、その根底には何が潜んでいるのか。中沢新一の『レンマ学』²もこうした探索から導かれた思考のひとつの到達点だろうが、これに同期する思索が、それ以外の分野や実践でも、最近あちこちで同時多発的に頭角を現しはじめている。本稿では、それらをも参照しつつ、人文知の復権と学術の刷新を模索・提言したい*3。



■2 「あいだ」の哲学への前哨戦：中沢新一 『レンマ学』（講談社、2015）書影

1. 「再現可能性」という神話について

自然科学の領域では、実験結果の再現可能性が、実証の裏打ちとして重視される。だがこの「真理」観には、哲学的に少なくとも四重の見落とし、あるいは短絡が絡まっている。

「再現可能」であるためには、環境条件が同一でなければならない。通常、科学実験の場合には、数値測定の座標軸を極端に切り詰める。有意でない想定された多くの測定軸は、事前に実験環境から消去されるか、あるいは観測結果には影響を与えないものと看做される。だがそれら除外された要因が本当に無関係か否かの判断は、論点先取であり、本来なら、実験以前には決定しえなかったはずである。未知の指標や、関与しないと安易に除外された条件が実際には決定要因となっていたことが事後に判明した事例もある。スペース・シャトル「チャレンジャー」の打ち上げ事故■3の原因究明で、リチャード・ファインマンは燃料ブースターのゴムのパッキングが低温で機能不全を起こしていた事由を発見した。これは設計者には想定外の原因だった。裏返せば、有効な数値が測定される環境とは、その数値が導かれるべく調整され、最適条件をあらかじめ満たした、人工的な孵化装置だったことになる。再現可能性は、それを招来する環境と共犯関係をおこし、いわば「癒着」している。この循環論法から仮に有効な計測が得られたにせよ、それがただちに仮説を検証することには、なりえまい。科学史家の金森修は、このような実験室環境を「死骸寸前」と呼び、しかし自然科学はこの死骸寸前の状態に真実の痕跡を捉えるという自己限定を自らに課した営みと定義した*4。



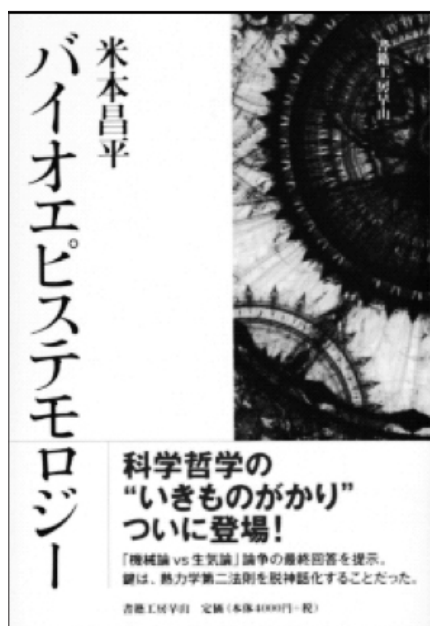
■3 スペースシャトル・チャレンジャー事故写真

ここで第2に問題となるのが、自然科学による数学依拠の信仰だろう。統計学は無限母集団を指定する。古典物理学も無限小や無限大を、数値計算の前提とする。だがどうだろう。数には0, 1, 2, 3……の自然数、負を含む「整数」さらにその比率である「分数」を束ねた「有理数」と、そこに円周率や平方根などを含む「無理数」を加えた「実数」が定義される。複素数以前のこの実数の段階で、すでに「同一」なるものの再現性は保証できなくなる。試みに、連続した実数を順に並べた「数直線」を任意の場所で切断してみよう。その切断面の一方の数値は、反対側の数値より必然的に小さいはず。だがそれならば逆に、そもそもこの数直線は「連続」した数からは出来上がっていなかったことになる。デデキントの「切断の論理」の初歩（の意図的誤解！）だが、こうして単体を切断した瞬間、切断面の一端と他端との「同一性」は喪失し、「再現」の根拠は、切断とともに、数学的にすでに破綻している理屈になる。

さらにここに第3の要素が加わる。そもそも宇宙の歴史にせよ、地球上の生態系にせよ、それらは有限集合でしかない。

ここに無限数の原理を無際限に適用できる保証はない。とりわけ生命現象は熱力学の第2法則に背反する。米本昌平■4はnegentropyの説明に、重力で坂を転げ落ちる巨岩の陰で、必死に小さな石を坂のうえへと押し上げる小人の比喻を好む*5。もとよりネグントロピーに生命現象の謎があるなら、それは原理的にいて物理法則では解明できない理屈となる。さらに無限大・無限小を前提とする数学を応用した経済理論は、当然ながら生態系の限界を無視する。実体経済を蔑ろにした金融経済の異常肥大は、その理論的帰結にはかなるまい。遺伝学者の斎藤成也は、時間の不可逆性と偶然の非決定性を排除した従来の自然科学、そこに巢食う「再現可能性」信仰を批判し、「宇宙の歴史」を提唱するに至っている*6。

これを踏まえて第4には、そもそも「同一」のものの「再現」とは何かが問われる。不可逆な時間性を無視した「再現」が根拠を失えば、「同一」性立証は、時間軸上のずれを含んだ複数の観察対象の通時的比較へと置き換わる。政策立案で頻繁に話題となるevidenceは計量経済学から派生したといわれるが、とりわけ日本ではevidenceとdataやinformationとの差異も明瞭ではない。「数値」を「情報」として扱うには自然言語の枠組みを捨象できない。「明証性」とはこの枠組みで登場する語彙だが、いうまでもなく自然言語で多言語翻訳を行えば、形態や内容上の同一性は当然ながら失われる。evidenceと「エビデンス」とは、形態も意味も、もはや同一ではない。意思疎通のうえでのこうした翻訳上の齟齬を回避するために登場するのが「等価性」equivalenceの概念だが、これは「明証



■4 物理法則に抗うシーシュポスとしての生命現象：ネグントロピーの生成として生命を定義する：米本昌平『バイオテクノロジー』

性」の「認知」acknowledgeの問題であって、知識knowledgeの真偽という次元を、必然的に超えている。

以上はきわめて基礎的な哲学的演習だが、こうした人文学的な基礎なくしては、自然科学や社会科学における「真実性」は担保しえない。世に喧伝される「文理融合」のまえに、数値と「エビデンス」信仰の基礎が、いかに脆弱な判断中止や思い込みに洗脳されているのかを、改めて再確認する必要があるのではないか。そこに人文知の学術的責務もある*7。

2. 「同一性」という亡霊

自然科学の実験も含め、「再現可能性」を立証する事実検証には、以前の計測と再現された計測とが「同一」と確認できることが前提となる。だがこの「同一性」

なるものも、突き詰めるときわめて曖昧になる。先にデデキントの「切断の論理」を意図的に曲解してみた。連続する数直線を任意の場所で切断すると、その切断面の両端は異なる数値を示す。両者が同一であったのでは数直線の定義にもとるからだ。この延長上で、実数の集合を数学的に確定しようとする、確定不能であることが立証され、不条理にいたる。思えば「アキレウスと亀」■5も、出発点でこれと同様の詭弁を弄している*8。これは結局、「連続性」に関する社会的通念や常識的な認識そのものを揺るがす。そもそも一般常識でいう「同一」と「連続」との定義そのものに撞着が孕まれていたのだから。さらに一般化して、ひとつのモノをふたつに割った場合、両者は「同じ」モノなのか？ 凸版や凹版の印刷を考えよう。



■5 同一性究定のジレンマ：『アキレスと亀』北野武監督
2008

たしかに原版と印刷物とは印刷紙面において噛み合い、そこに発生する押印を、われわれは通常、原版と同一の「しるし」が複製されたものと認証する。だが両者の「同一性」は、版下と印刷物とがあくまで凸凹に食い違っているという「不同一性」なくしては成立しえない。これは水平軸（印字面）では同一なものが、垂直軸（活字と紙面）から見れば同一ではない、という直交座標の問題だろう。さらに原型とその複製へと話題を広げるならば、同様の問題は、遅くとも古代ギリシアで明確に気づかれていた。「イデア」（名辞）とそれが刻印される事物とは「同一」なのか。この疑義は、アリストテレスがプラトンを批判した論点だった*9。加えて、鏡像関係に置かれた対掌性は「同一」なのか？ 光学活性の旋光性と化学における分子の立体構造とでは、「左右」の定義がすでに折り合わない*10。単純に言って、もはやこの水準で、「同一性」といった常識的表現はあまりに雑駁すぎて、学術的議論に耐えない。

ここで「永劫回帰」「輪廻転生」を考えよう。とかく荒唐無稽な幻想とされかねない観念だが、以上のように「同一性」の定義そのものが揺らぐと、事は常識を裏切る転回を見せる。そもそも「同一」のものが再帰したにせよ、「前世」には「現世」と「同一」との意識はありえない。過去（の個物）が、まだ到来していない未来（の個物）と同一である、といった意識はもち得ないからだ。「同一」との意識は後世から時間軸を遡った後智恵としてしか発生しえない。だが「同一」との意識が加わった分だけ余剰が付随するため、それは結果的に「異」なものになる。にもかかわらず「回帰」が発生するなら

ば、そこで回帰したものを「同一」と認識することこそ誤謬であり、「我」の同一性の根拠は、逆説的にも「差異」のなかにしか認められないことになる。ここで「同一性」は事実検証の問題から逸脱し、時間を遡及しての過去認知を未来へと投企する実存行為（すなわち「認知」*acknowledge*）の謂となる。唯識仏教の見る「我」とは、それ以外ではありえまい*11。畢竟「自己同一性」とは「自己」ならぬものに対峙してしか成立し得ない、という逆説が、ここから導かれる。そもそも「我」を「我」によって根拠づけようとする試みが自己撞着だったのだから。そしてこれは、一神教の唯一神の自己規定における本源的背理として、『聖書』創世記冒頭のヘブライ語のギリシア語訳で、すでに問題とされた*aporia*だった*12。

すなわち——光は自らの姿を己が光によって照らし出すことはできようか。純粹の「顕れ」は自らに「顕れ」することはできまい。反対に、一度として消滅したことのないものの前でいかに姿を隠しおおせることができよう。これはヘラクリトスの断片に残る言葉だ。「視」は「視」というみずからの深淵*abgrund*を目にすることができるのか——「深淵」が「根拠の喪失」の意味だとすれば。だからこそ、ニーチェは「大いなる正午」の刻限、大地に落ちる影の震えに、「同一性」の幽霊じみた正体を認めた。永劫回帰は、自らの影に怯える。だがその投影にこそ、輪廻は、到達可能な究極の自己肯定の「顕れ」を、権利として主張できる（山下善明）*13。

思えば形而上学 *metaphysics* とは、現在言うところの物理学 *physics* を超えることで反対にそれを基礎づける学問であっ

たはずだ*14。あたかも二匹の蛇が互いの尾を噛むように。形而上学を古典の文献学的訓詁学の縛めから解き放ち、あらためて自然科学を司る学術の根拠の再吟味、そこに巢食う（非）常識の掘り起しに役立てる責務があるのではないだろうか。

3. 「ロゴス」と「レンマ」との桎梏

現在の自然科学の世界で金科玉条とされ、無前提の前提として通用している格律に、形式論理学で言う「矛盾律」「排中律」がある。これに従ってアリストテレス流の「三段論法」を踏まえないかぎり、現今の科学雑誌に論文が掲載されることはありえない。一方でこの自己限定が現今の科学にとって大きな足枷となっている。だが他方この枠組みを逸脱した論法は、学術の名にもとる妄想、神秘主義として、白眼視され、学会の門戸から放擲される。両者のあいだには悪循環がある。湯浅泰雄はそこに科学への過信を見た。オカルト信者は経験科学がやがて心靈主義の正しさを立証してくれるものと信じ、逆にオカルト糾弾者は経験科学に照らしてオカルトを排斥することこそ、科学擁護のために不可欠と信じているからだ*15。

インドのナーガルージュナこと龍樹に帰される「中論」は「同一律」（その難点は本論前節で検討済み）および「矛盾律」「排中律」に加えて「肯定でも否定でもない」「肯定かつ否定」の4つの「律」*lemma*を立てた。通称テトラ・レンマと呼ばれる*16。「中」を排して肯定か否定かの対立に事態を集約すると、両者の存立を潰しあう壊滅を招く。その狭間*mezzo*すなわち「中」に、西欧論理学の限界を破る可能性を見た論者は多い。*Mésologie*

（「風土学」と訳されるが、直訳するなら「中間学」）を提唱する Augustin Berque もそのひとり。近年、山内得立の『ロゴスとレンマ』を再発見したベルクは、その仏語訳も達成した*17。こうした潮流のなかにあって、南方熊楠に注目してきた中沢新一の『レンマ学』は、現時点で、その学問の遍歴における一到達点をなす*18。その前提となる常識を、次に簡単に整理しておきたい。

「同一律」「矛盾律」「排中律」に閉じた狭義の logos は lemma に包摂される。logos の世界から tetra lemma の世界は不可視だが、tetra lemma の世界からは logos の世界は見えていることになる。ちょうど三次元の世界からは平面が見えるが、平面に閉じられた世界では垂直軸の空間が見えないのと同様である。

このテトラ・レンマを取り込んだ『華嚴経』はタクラマカン沙漠のホータンで集輯されたと推定されるが、それを定式化した中国の華嚴教学は、「中論」の「色即是空」と「唯識」の「空即是色」とを弁証法的に統合する。法蔵に帰される『華嚴五教章』の説く「相即相入」「一即多・多即一」の観は、すでに西欧の形式論理学の表層を突き破っている。さらに澄観は「事法界」「理法界」の先に「理事無碍法界」「事事無碍法界」の四種法界を立てる。井筒俊彦は中国で成立した『大乘起信論』に依り、理事無碍から事事無碍への往相と還相との円環・循環に「悟り」の動態を定位した*19。

「事事無碍」に囚われる体験とは、何か。それは物事の輪郭が融解して連続体へと変容し、自他の区別が相互浸透する世界への参入となる。空間的には長井真理の語った「筒抜け」現象*20、ガダリ＝

ドゥルーズが精神疾患で述べた「穴だらけの皮膚」状態に等しい*21。またこれが時間軸に作用すると、原因・結果の順序が転倒し、過去・現在・未来の関係も融通無碍になる。前節で触れた輪廻転生という「錯誤」も、こうした時間軸の輻輳・逆転現象を前提とする。この心的状態では、自己の身心の不調が、そのまま世界崩壊の予兆へと直結する。恐慌は発作を招く。統合失調症という人格的「統合」integrity 以前の状態、主語＝述語という統辞言語世界以前の「原風景」に晒されるからだ*22。「事事無碍」状態は、忘我・脱魂状態に等しく、容易に憑依を招く。「正常」な人間社会では「狂気」と看做される混沌たる融溶状態なのだから。

中沢はここで神経の刺激伝播に関するフロイトの仮説を援用し、ニューロン系の統辞・選択作用に「ロゴス」的知性の萌芽を定位する一方、「レンマ」的知性を、ガロア「群論」の「対称性」に重ねる。「対称性」とは平たく言えば「AがBを食べる」と「BがAを食べる」とが「お互い様」で同値になる循環的世界。西田幾多郎を受けて木村敏などの唱えた述語論理の基底を探る試みである。「述語論理」は「私は泳ぐ」「魚も泳ぐ」だから「私は魚」となる「融即」の世界、そこには末綱恕一の説く「体」（字義）と「用」（作用）も投影される*23。

以上が、必要最低限な道具立て、原材料の調達となる。だが調理に進む前に確認しよう。大陸中国では泰西の logics を「逻辑学」と音訳し、中国典籍古来の「論理」とは峻別する。その背景にはスターリン主義と毛沢東『矛盾論』の政治的影響を無視できまい。ところが漢籍の「論理」は欧米語で logic と訳される。そのた

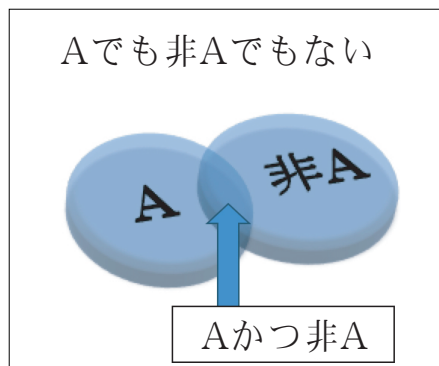
め差異が欧米語への逆翻訳では消滅してしまい、学術の世界だけでなく、政治経済に至るまで、不可視の相互誤解が蔓延している。この擦れ違いの克服も、次なる課題となろう。ここにも（「矛盾」を認める）レンマの世界像を（「無矛盾」を原則とする）ロゴスの的に記述することの孕む方法論的な背理が伏在する。『レンマ学』巻末の英文講演は、周到な立論だけに、かえってその言語的不自由が露呈する*24。

4. 「同一律」「排中律」「矛盾律」の彼方

ここまで「同一律」「排中律」の問題点を指摘してきた。その傍らで次に考慮すべきが「矛盾律」だが、実はprinciple of contradiction（「Aかつ非A」は無理）を、「矛盾律」（すべてを貫通可能な矛と絶対に不破の盾）と置き換えて翻訳するのは、原理的に不適切、と筆者は考えている。Aが「矛」である場合、非Aを「盾」に譬えた比喩では、論理に拘り替えが生じるからだ。逆にいえば、先にも触れた毛沢東の『矛盾論』は、形式論理学（つまり「逻辑学」）で言うlogicとは、もともと反りがあわない。中国語の「論理」はlogicとは形式論理学的には「同一」でも「等価」でもない——何がなんでも約束事として両者を「同一」とみなす、という規約論を取らない限り*25。さらに、すでに触れた活版印刷の比喩は、非A（活版活字）がA（印刷された印字）と鏡像として「同一」な場合の典型例だろう。加えて「即」や「非即」の論理は、通常「存在」の同一性（「である」「ではない」）で訳されるが、厳密に考えれば、文法的な構造や機構からしても、単純には置換・還元できない。ここにも、

いわゆる「東洋哲学」に対する西洋哲学側の「誤解」の種が潜む。その所以も、拙著『接触造形論』で縷説した*26。なお山内得立『ロゴスとレンマ』はlogicにおけるcontradictionの訳語に無批判に「矛盾」を充てており、遺憾ながら、この点では配慮に欠けている*27。

さて「中論」は「排中律」tiers exclusが排除した第三項（Aでも非Aでもない）＝「中」に注目する■6。この「中」は、論理的には「不在」であるから、数学の「零」に通じる。「零」はサンスクリットの名詞形ではsunyata（शून्यता）すなわち「空」でもあり、集合論なら空集合にも通ずる。スニャータは「空っぽ」だが、腫物が「膨らむ」のも同義であり、内部は欠如という意味の「無」ではなく、逆に充滿している場合もある。集合論でも同様に空集合は、条件によっては無限集合と通底する。中国では漢訳仏典でこれに「空」が充てられ、道教の「無」とも文脈によっては置換可能な扱いを受けた。ここですでに「中」こそが「道」という解釈も可能となる。道程の途上の「道すがら」、ハイデガーのunterwegsがそのまま「道」Daoの言い換えとなる。ここに岡倉覚三『茶の本』独訳の感化があったか否かは



■6 包含関係のベン図（稲賀作図）

立証不可能だが*28、岡倉とも交友のあったインドの詩人、ラビンドラナータ・タゴールにも同様の「道すがら」の聖性を詠った詩句が知られる。なお「無我」はパーリ語では anattā アナッター、サンスクリットでは, अनात्मन anātmanであり、「我」に相当するアトマンの否定形となる。般若思想ではこの「無我」を「空」と表現する。

ここで問題となるのが、こうした概念の欧米語への翻訳である。emptinessであれ nothingnessであれ、こうした欧米語への翻訳語彙は、否定的な含意を拭い難い。「無我」は霊魂不滅の信仰とも背馳する。仏教に対するキリスト教政治学の神学的な嫌悪も加わり、nothingnessはnihilismとの連想から創造主の存在を認めない無神論、邪教の教説として排斥されてきた。書下ろしゆえか、聊か雑駁な筆致なのが惜しいが、ロジェ＝ポール・ドロワ『虚無の信仰』*Le culte du néant*が、欧州における仏教学受容を通覧して、その「無理解」の様子を解析している。*29サルトルの『存在と無』*Être et néant*（『有と無』と訳せ、との立場もある）からも明らかに、西欧哲学が存在論を基軸にしたのに対して、空や無を基軸とする「東洋思想」が西欧圏の「哲学」の領域で議論の対象へと昇格を果たすには、哲学が、建前上とはいえ、キリスト教神学から離脱する時期を待たねばならなかった。

その転換点に立つのが、ハイデガーの『存在と時間』（あるいは『有と時』）。だがそのハイデガーはVerborgenheitすなわち「隠されてあること」の謎をUnkenntlichkeit「不識性」として隠蔽し、問題をそこに閉じ込める（中沢：271）。「開示性自身も、なお隠されたものにとどまる」die

Unverborgenheit selbst jedoch bleibt also die verborgen（G.A. 6,2, S.318）というように。

だが、ここに二重の屈曲を導入して、常識を転倒させたのが、前掲の山下善明の所論だった。それによれば、自己同一性に固執する迷妄こそが存在隠蔽であり、隠されてきたものの開示は永劫回帰あるいは輪廻転生の姿として現れる。結果として、本来の「自己同一性」は永劫回帰／輪廻転生を通して顕現する「存在開示」にはかならない、と再定義される*30。キリスト教的な「啓示」や「顕現」と同一視すると厄介だが、「現れ」が真実の開示であるならば、そこにこそはじめて「同一性」が実現されることになる。

改めて問おう。この見識は、中沢新一の『レンマ学』と如何に関わりうるのだろうか。

端的にいえば、山下善明が哲学的思索によって解体・再構築してみせた「自己統一性」と「輪廻転生／永劫回帰」との刷新は、logosの世界に囚われていたこれらの概念をtetra lemmaの世界に再生させる試みだった。統辞構造に立脚した通常の「自己同意識」がlogicsの世界であり、そこでは「同一律」「矛盾律」

「排中律」が支配する。だが岩盤を砕き、水面下を掘削すると、そこにはtetra lemmaの世界が横たわっている。その底流層を開示することが「レンマ学」の目論見の一端となろう。その境域には、サルトルが融溶状態と述べたアモルフな流動があり、永劫回帰／輪廻転生が瞬時に反復し再生を繰り返す。その点滅は、

『单子論』のライブニッツなら無数のモナドのあいだに閃く「雷光」fulguration（中沢：256, 390）と呼んだでもあろう相互

の呼応や放電によって、数学的な無限小にまで相乗を重ねて侵入する。そこには光速での振動をやめない「相即相入」の曼荼羅の生成流転する伏在系が見えてくる。中枢神経の「論理」の世界からは隠された暗在系である。熊楠が粘菌の原形

質流動に認めた、生態系内の異なる「知性」も、これと他ではない。——だがいきなりこのように述べたのでは、いかにも唐突で説明不足だろう。次にこの局面にゆっくりと測鉛を下ろしてゆきたい。

(次号につづく)

【註】

- * 1 中垣俊之『粘菌 偉大なる単細胞が人類を救う』(文藝春秋新書, 2014年)。
- * 2 その良質な検討として、中澤豊『哲学者マクルーハン 知の抗争史としてのメディア論』(講談社メチエ, 2019年)。なお稲賀『絵画の臨界』(名古屋大学出版会, 2014年)あとがき参照。
- * 3 なお, こうした事情から, 本稿は萌芽的な思索を大急ぎで書き留めた段階にすぎず, まだ十分には読みやすい行文とはなっていない。そのことを冒頭に一言お断りする。
- * 4 金森修『東洋／西洋を越境する——金森修 科学論翻訳集』(小松美彦・坂野徹・隠岐さや香編, 読書人 2019年) 52頁(ただし, 金森は, この科学の限界に対して, むしろ肯定的である)。
- * 5 米本昌平『バイオエビステモロジー』(書籍工房早山, 2015年)とりわけ第6章。
および『ニュートン主義の罠』(書籍工房早山, 2017年) 242頁以降
(ただし本稿著者は米本に全面的に同意してはいない)。
- * 6 齋藤成也『歴誌主義宣言』(Wege, 2016年)。
- * 7 本稿は元来, 中沢新一『レンマ学』(講談社, 2019年)への書評として準備された考察の前提・余滴から発展した。
- * 8 津田一郎『心はすべて数学である』(文藝春秋, 2015年) 21-23頁。本書については後に詳述する。
- * 9 桑子敏雄『同名性の問題』『エネルギー』(東京大学出版会, 1993年)。
- * 10 中沢弘基『生命誕生 地球史から読み解く新しい生命像』(講談社現代新書, 2014年) 232-239頁。
- * 11 稲賀繁美『時の揺籃・魂の移ろい』『接触造形論』(名古屋大学出版会, 2016年)。
- * 12 秦剛平『七十人訳ギリシア語聖書入門』(講談社メチエ, 2018年) 326頁以下。
- * 13 山下善明『哲学の苑にて』(晃洋書房, 2018) および同氏著 *Identität als Unverborgenheit*, 所収“Ein Beitrag zum 'Künftigen Denken' aus der Ferne” (Ergon Verlag, 2003) ほかから深い示唆を得たが, その高度なドイツ語表現の不適切な敷衍に留まることを, お詫びする。
- * 14 アルマン・マリー・ルロワ『アリストテレス 生物学の創造』(みすず書房, 2019年)。
- * 15 湯浅泰雄『解説』湯浅泰雄・竹本忠雄(編)『ニューサイエンスと気の科学』(青土社, 1987年) 216-7頁。
- * 16 三枝充應『中論——縁起・空・中の思想』(レグルス文庫 第三文明社, 1984年)。
- * 17 Yamauchi Tokuryu, *Logos et Lemme-Pensée occidentale, pensée orientale*, traduit par Augustin Berque, CNRS éditions, 2020.
- * 18 関連する書籍として, 木岡伸夫『〈あいだ〉を開く——レンマの地平』(世界思想社, 2014年)。
- * 19 井筒俊彦『意識の形而上学: 大乘起信論の哲学』(中央公論新社, 1993年)。
- * 20 長井真理『簡めけ体験について』『内省の構造: 精神病理学的考察』(岩波書店, 1991年)。
- * 21 稲賀『接触造形論』第3部第1章, 註34。
- * 22 「原風景」は, 主述の統辞論理が成立した段階から遡って, それがまだ成立しない状況を, 後付けで統辞論理によって記述することで, 意識に現れる。その限りで「トラウマ」と同様に, それとしては存在しなかったはずの「原罪」が遡及的に「捏造」される恐れは避けられない。「輪廻転生」も同様であり, その「原因」と目される過去は, 実際には「結果」が現れて初めて, それとして事後的に認められる。この機構を通常の因果律や三段論法に書き換えることは, きわめて危ない。冤罪を招く論理構造がここに端的に露呈している。「決定論」に基づく因果律的論理構築には, この危険が本質として内在している。
- * 23 中沢新一『レンマ学』第7章「対称的無意識」および付論「レンマ的算術の基礎」「心のレンマ学」ほか。
- * 24 Shinichi Nakazawa, "A Lemma Science of Mind, The Potential of the Kego Sutra," IAAP Congress, Kyoto, 18 Aug. 5 Sep. 2016.
- * 25 加地 伸行『中国人の論理学』(ちくま学芸文庫, 2013年)が基本的古典だが, 不思議なことに本書では, 欧米語の中国語への翻訳と両者の懸隔については一切言及がない。
- * 26 稲賀『奈落と渦巻き』『接触造形論』166-189頁。
- * 27 稲賀『接触造形論』第2部第2章註28。
- * 28 Yoshiaki Yamashita, *Identität als Unverborgenheit*, Anm.339, S. 166.
- * 29 ロジェ=ボル・ドロワ『虚無の信仰』島田裕巳/田桐正彦訳, (トランスビュー, 2002年)。
- * 30 Yamashita, "Ein Beitrag zum 'Künftigen Denken' aus der Ferne", in *Identität als Unverborgenheit*.